

保育者養成における創造性を涵養する演劇的表現指導

Theatrical representation teaching to cultivate the creativity of teacher

佐藤 厚
Sato Atsushi

キーワード：言語、身体表現・インプロヴィゼーション・協働活動

はじめに

文部科学省幼稚園教育要領において、保育者の専門性は「幼児一人一人の行動と内面を理解し、心の動きに保育を展開することによって心身の発達を促すように援助することにある。」とある。これを、保育内容「表現」と関連付けるとするならば、表現させるために保育するのではなく、保育者が幼児の表現行為「言語・身体」に気づき幼児の内面を洞察することが保育者の役割と言えよう。また、エリクソンは「子ども時代における《演劇的》な遊びは、自体の雛形を創造し、そこで過去の諸側面を再体験し、現在を再演し再生し、さらに未来を予測する、という人間の生得的傾向の幼児的形態を提供するものである」と述べている。また、「劇あそび等の表現活動の中には『創造的な自分の発見』と『一緒に作り出す喜び』があり自分と他者がいつも何でも同じではなくとも、つまり、それぞれに異なっても仲間と共同しあえるという喜びを体験することなのだ。それぞれが自分なりのイメージや考えや技術を持ちつつ、一緒に創り出せるという喜びを満喫できる場こそ、ごっこ遊びそのものなのだ。」という。

上記事項をふまえ、領域「表現」における授業では、学生がやがて保育者として、子どもの「心情、意欲、態度を尊重し、劇的行為を受容することができるようになること」さらに、学生自身が演劇的授業を通して、仲間達と協働活動することにより「自身の表現力の変容に気づくこと」ができるような演劇的授業プログラムの開発が必要と考える。尚、学生たちの変容を分析するにあたり、学生たちの授業リアクションシート、レポートは許可を得て本稿内に掲載したものであり、上田女子短期大学倫理委員会にて承認されたものである(平成27年12月14日付)。

1. 研究の目的と方法

目的：表現系科目「児童文化演習」アクション・リサーチを活かし省察する。表現系科目「児

童文化演習」では学生たちが「インプロゲーム」（即興演劇ゲーム⇒本稿では「インプロ」とする）や朗読劇、表現あそび（ごっこ遊び・劇あそび）を通じて表現力を豊かにすることを旨とする。授業内の活動は保育士養成課程の「表現」等の授業において学生の表現力を豊かにするため、つまり学生が仲間と共に表現する喜びを体得し想像性や創造性を発揮でき、協働して活動に取り組むとができるために演劇的手法を導入し、その有効性を探求することにある。

方 法

〈演劇的表現活動〉

人間形成と表現活動について、子どもの遊び、児童文化財（主に童話、絵本、民話など）を用いてごっこ遊び、劇あそび、朗読劇へ展開し「想像から創造へ」の表現活動を体験的に学び、児童文化財を「総合表現」として演劇的な表現あそびに活用する必要性を理解すること。そして、表現あそびを通じて学生自らが指導者となるべく資質を探り、保育の場における物事に対し即応できる表現力を身につけていけること、すなわち表現力が豊かになることを主眼に置き、まずは自己表現することに対しどのように感じているかを調査する。その後、インプロおよび朗読劇の活動を通じ、学生それぞれにどのような変容が起こったのか再調査する。

〈アクション・リサーチ〉

ストリンガーはアクション・リサーチについて、「特定の問題を解決するための体系的な行動の手段を提供する探究あるいは調査への協働的アプローチである。」としている。そして、アクション・リサーチがすべての問題を解決するものではないとしながらも、「問題の状況を把握する手掛かりを得る手段、またその公的・専門的な生活において直面する問題の効果的な解決策をつくる手段を提供する」としている。また、効果的なアクション・リサーチは、「現象学的（人びとの実際の経験・現実に焦点をあてる）であり、解釈的（行動や活動についての人々の解釈に焦点をあわせる）であり、そして解釈学的（自らの生活における出来事についての人々の意味づけを組み込む）である。」としている。

レヴィンは、「行動は『現在ここに』現存する場の力動によっていると考え、人の生活空間にどのような力が働いているのかに注目」した。そして、秋田は、「アクション・リサーチは集団との関係を場の力学でとらえることから個人の心理的行動を説明するという発想から生まれた研究方法である。」とし、レヴィンが指摘する「ワークショップが強力な道具の一つになる」ことが集団相互関係を処理する方法としてとらえ、「行為（action）—研究（research）—訓練（training）」（変化のための技能の訓練）の三活動が相互に作用しあって、アクション・リサーチが実施される」という。そして、アクション・リサーチのはじまりにおいて「①場の力学に基づく単一事例の診断 ②螺旋的に「計画—実行—評価」をとおして連続して変化を追う ③その場の人の主体的参加 の三点をレヴィンのメソドロジーの思想的特徴」としている。以上の点から、アクション・リサーチはステークホルダー（調査される事柄に最も影響される人々…本研究では「学生」）が、表現に対する「恐れ」を打開する方策として、演劇的表現活動のイ

ンプロ経験を探り、自らの表現活動についてより明確な理解を得ていく上で有効な方法である
と考える。

2. 授業内容

平成27・28年度ともに、授業開始時に学生たちに「自己表現すること」に対して感じている
ことを記述させ、下記、A、B、Cの三つに分類してまとめた。

〈表現することへの抵抗感〉

●平成27年度 受講生12名

A：表現に対しあまり抵抗を感じていない。3名(25%)

B：幼いころは抵抗を感じていなかったが成長と共に抵抗を感じるようになった。6名(50%)

C：幼いころから抵抗を感じている。3名(25%)

全体の総数が12名ではあるが、75%が自己表現に対し何らかの抵抗を感じている。

●平成28年度 受講生22名（A、B、Cの内容は同じ）

A：2名(9%)

B：13名(59%)

C：7名(32%)

受講学生91%が表現することに何らかの抵抗を感じている。

〈要因〉

インプロの創始者キース・ジョンストンによると「人は成長とともに社会的ころとして、
4つの恐れをもたらす」といわれている。

〈4つの恐れ〉

①失敗への恐れ：失敗をすることへの恐れは、すべての人がもつものである。行動することは、
失敗するリスクを伴う。もし何もしなければ失敗することもない。そこで、自然に表現した
り行動したりするのを抑制して、失敗を防ごうとする。

②評価への恐れ：人は成長するにつれて、自分の表現や行動を他者から評価されるようになる。
また、このように自分を見せたいという、他者に見せたい自己イメージができてくる。する
と、自分が思ったこと、感じたことをそのまま表現するのではなく、他者からよく評価され
るような、他者に見せたい自己イメージに近い表現をしようとする。そうすると自然発生に
よる表現は抑制される。

③未来・変化への恐れ：未来は予想がつかないものである。変化をすることによって、自分に
悪影響があるかもしれない。そのために、人はなるべく変化をしないようにしたり、変化を
するにしてもなるべく未来を自分の思いどおりになるようにコントロールしようとして
する。外からの影響を受けることを恐れて、からだを固めてしまい、外に対して開かないよ

うになる。自然に生まれてきた想像は、どのようなものかわからない予測不能なものである。そのため、それを表現することを抑制するようになる。

- ④見られることへの恐れ：人間には人前に立つことへの恐怖が普遍的にある。その恐怖によって、からだが緊張したりネガティブになったりする。これらの恐れは検閲をもたらす。検閲とは「こんなことをしたら変ではないか?」「こんなことはやめたほうがいいんじゃないか?」と自分の中に自然発生的に生まれたアイデアをチェックすることである。脳の中には検閲官が住んでいる。恐怖があるときには、他の人から責められないようにと、具合の悪そうな顔をしたり、みじめそうな顔をしたり、苦しそうな顔をしたりする。これらは、からだを固め、こころをネガティブにして、さらに自然発生を阻害する
- 学生たちが表現することに抵抗感を感じている背景には、上記の①～④までの「恐れ」が要因になっていると考えられる。

木村が、竹内の理論を用い、「必要なのは、自らが『創造の場に身をおいて自らを 動かし、変え、そして他者につき動かされることを体験』（竹内1989 p. 129）してみることである。教師は、このような体験を通じて自らの『制度としてのからだ』を劈（ひら）くことで、子どものからだまで、自分を劈き、届け、共振することができるのである。」と述べているように、学生たちがやがて指導者として子どもたちと共に表現することを楽しむことができるようになるためにも、今一度、まわりの目を気にせず、失敗や評価を恐れることなく、思いきって自己表現できる機会に身をゆだねてみる必要があると考える。

〈表現することへの「恐れ」を解決する方法〉

- ① [普通にやる・頑張らない] スポンティニアス（自然なひらめき）になるためには、よくならうと何か特別なことをしようとしなくてよいことである。（失敗）※意図的な失敗はしない。
- ② [独創的にならない・当たり前のことをする] 表現することは「何か特別なことを、人とは違うことをしなくてはいけない」と思っている学生がいる。かえって既存の狭い範疇での発想に偏ってしまう。
- ③ [賢くならない] 表現する時に、賢く（clever）やろうとすると、他者から賢く見られたいという評価への恐れが強まる。
- ④ [自分を責めない] インプロにおいて、自分の行動に責任、特に失敗の責任を取ろうとすると、他者の評価がより気になり、失敗を恐れて思い切った行動をとれなくなってしまう。
- ⑤ [想像の責任を取らない] キースは「想像はそれ自身の意志を持った巨大な動物である。それを面白がろう。しかし、責任は引き受けない。あなたはその飼い主ではない。」と言って、想像によって評価されることを恐れないようにさせている。

〈主なインプロゲーム〉

A：五感で話す：朝起きてから大学に着くまでの行動に「視・聴・触・味・嗅覚」の五感と喜

怒哀楽の感情が伴う場合はそれを加えて話す。

B：身体表現：～になる（物や動物、人物）・・・相手の題目に即応して身体表現する。

C：二人で一つ：「鉛筆と消しゴム」「ほうきとちり取り」等の題目に対し二人で言葉を交わさず身体表現する。

D：何してるの？：動作（歯を磨くなど）をしている人に「何してるの？」と尋ねる。動作をしている人はその動作とは全く違う動作（バスケットしている等）を発言する。質問者はバスケットの動作をする。指導者の合図があるまで交互に繰り返す。

E：プレゼント：相手に「はい、プレゼント」とプレゼントを渡す。「ありがとう〇〇。」自分が渡したのとは違う物をリアクションされても相手の発想を受け入れて話を続ける。

F：イエスアンド専門家：相手を日常的にはあまりない専門家として紹介し、2人のトークショー形式で話を創作する。

〈朗読劇〉

岡田は「言葉」と「表現」の中で「言葉は人間の自己表現のための手段として特に重要なものである。」と言い、「幼児に豊かな言葉を獲得させるためには親や教師自身がイメージを豊かに表現化することができ、かつ明瞭で正確な言葉が使えなければならない。（中略）このことを自覚して自ら言語表現能力の向上努力を怠ってはならない。」と記している。昨今の学生たちの言語表現は「うざ」「やば」「きも」などに代表されるように短縮化された表現が多い。今やSNS（Social Network Service）の中で若者たちにはびこる言葉が日常会話にも反映されている。児童文化演習の授業内で朗読劇を取り入れるのは、学生たちに正しい言語表現を教えるためだけのものではない。そもそも朗読劇の始まりは、1970年頃から、ニューヨーク市立大学のメルビン・ホワイト名誉教授やミズリー州立大学のレスリー・コーガー博士ら为先駆者として、サンディエゴ州立大学のウィリアム・アダムス教授らによってリーダーズ・シアター（朗読劇）という表現の分野が開発された。ホワイト教授もアダムス教授も社会学者であり、人間関係学の具体的方法論として考案、実践されてきたのである。（演劇学のコーガー博士は人間関係学の主旨に副って演劇側からサポートされたものである。）アメリカでは、20世紀後半から学校教育の場で口頭伝達の訓練を目的とし、あるいは歴史、科学、芸術への理解度を高める学習して、さらに図書館における読書指導として文学作品に体験的全身的に触れさせる方法として使われ、また、移民子弟の語学教育（バイリンガル）としても効果を上げているのである。朗読劇がコミュニケーションの修練として人間関係学の中で考案されたねらいは、全身的総合表現にあったのではないと思われる。朗読劇の定義として岡田は「文学を目に見えるように、耳に聞こえるように観客に伝えること」と言う。いわゆる写實的、具象的表現ではなく、観客が作品の世界を想像できるような視覚的表現と、語り手が文学作品から感じ得た内容を音声表現によって豊かに伝えることである。保育の現場においても、表現者が保育者で観客が子どもたちとするならば、日常保育の中でも心に感じたことをしっかりと子どもたちの方向を見つめて伝えることが大切であろう。学生たちは、朗読劇の表現方法を習得することで、感情の起伏による声の大

小をコントロールすることができ、明瞭な音声表現を読み聞かせや素話に応用することができる。しかし、技巧的な側面ばかりが先行してはならず、内面的な感受性を高めていくことと並行して行われるべきである。書かれた文字をただ音声化するというのではなく、書いた作者の意図や、登場人物の感情を感じ取って、それを体現することが大切なのである。また、学生たちが朗読劇の創作活動を通し、作り上げた作品、自身の頑張りや晴れの姿を子どもたちの前で披露することは、個人、また集団としても達成感や感動を味わうことにつながる。A.F.アリンソンは「教育におけるドラマは、創造的であると同時に、創造を解釈するものでなくてはならない」と述べ、座学では習得しにくいことが、実演することによって深い理解となる可能性がドラマ教育にあることを示唆している。さらに岡田は「人の心がよくわかり、それを想像する能力を高めるために演ずるのが演劇教育の目的なのである。」と述べている。朗読劇は造形表現、音楽表現、身体表現を多数取り入れられるものではないが、作品を創作していくうえで学生たち自身が、表現方法に工夫が必要と感じた場面では、上記の表現を効果的に取り入れている。それは「個人の独自性と、社会的な結合との調和」を達成する有効な手段と考えるからである。学生たちが、自分たちで考案したものに対して試行錯誤する中で、失敗しぶつかり合いながら協働的な創作活動を体験することは大切なことである。

3. 結果・考察（授業映像の振り返り・レポートのまとめより）

〈インプロゲーム・朗読劇を通じての学生自身の変容〉

[表現することに対して]

- ・初対面の人、相手の目を見ることができない。
- ・ほとんど関わりがなくて存在を知っている程度の人については、やりとりも遠慮がちであった。
- ・間違えることへの不安が強かった。
- ・間違いたくない（わからない）という気持ちから、自分の中で確信を得てから行動したいという気持ちになり、動いてみるということができなかった。
- ・周りの視線や評価を気にして表現することや人前に出ることに苦手意識をもっていた。
- ・人見知りが激しく、初対面の人と話をするのがあまり得意ではない。

[授業全体を通じて]

- ・伝えること・表現すること・演じることを皆と一緒に全力で楽しみながら、動いたり話したりしたことで、表現して相手に伝えるということが楽しいと思える瞬間がたくさんあった。
- ・「相手を見ようとする気持ち」・「相手を知ろうとする気持ち」・「自分から自己開示しようとする気持ち」の3点が生まれた。
- ・表現することは恥ずかしいことではなくて、伝わりと嬉しいし、楽しいことであるというポジティブなイメージが変わった。

- ・授業での表現活動が回数を重ねていくにつれ、今まで話をしたことの無い人と話すことができた。

[インプロの各活動A~Fに対する意見]

- ・目を見ることを受け入れられたと感じると、相手に対して安心感が生まれる。A
- ・日常的には無意識なことを意識的に発想、発言することで感覚が磨かれる。A
- ・自分一人では完成しないので、意識的に相手を見るということを学んだ。C
- ・自身の相手への無関心さを知らされた。C
- ・相手の動きを自分の動きで補完し一つのものを作りあげるゲームである。より意識して相手を観察する必要があった。C
- ・相手の表現を手掛かりにして、何を考えているのかをとらえようとするのが大切。CE
- ・わからないことを解消するために実践をすることが重要であった。このことに気づいてから、相手の動きをより知ることができるようになった。DF
- ・相手の動きに関心を持たないといけない。BF
- ・自己開示することへの恐怖感や抵抗が薄れ始め、もっと大胆にわかりやすく伝えようという意識が芽生え始めた。BCE
- ・(活動に対する) 自分のイメージと知識をフル活用しながら、「専門家」になりきると意外性のあるものができた。F

[朗読劇活動を通じて課題への気づき]

- ・身体を使って表現することよりも表現をする前に想像したり、イメージしたり、特徴を捉える事の方が苦手だと知ることができた。
- ・自分のアクションに対する相手のリアクションをしっかりと受け止めることである。それは、子どもの反応を受け止めることにつながる。
- ・保育者として子どもに関わる際に、子どもの興味関心を掴んではたらきかけることが重要となる。
- ・相手に大事なポイントがしっかり伝わるように、わかりやすく表現して伝えるということ意識してできるようになっていきたい。
- ・想像力を高めていくための手段として、様々なジャンルの本を読み、読書を通して想像力を豊かにしていく。
- ・表現することにあまり抵抗は感じていなかったが、周りを気にして周辺を落ち着きなく見てしまう場面が多くあり、今後子どもの前に立つ立場として良くない姿ではないかと感じている。これからは誰に見られていても恥ずかしくない立ち振る舞いができるように気をつけていく。
- ・保育者として表現力は大切になってくる。体を動かすだけでなく、ピアノや歌を歌うこと、絵を描く、ものを創ることも表現だと思うので、これからも相手に伝わりやすいような表

現ができるようになりたいと考える。

- ・子どもとかかわる職業に就けた場合は、先輩保育士の方に疑問点などを自分から聞きにいき、関わりをもてるようにしていきたいと考える。そして、話すときはしっかりと相手の目を見て、伝わりやすいような言葉で接していきたいと思う。
- ・今まで「表現している」と思っていたことは、既成概念的に形を真似してただけで、表現はしていなかったことに気づいた。
- ・保育の現場では心に感じたことを表情、身体に力を入れるタイミングなどを考えて表現していくようにする必要がある。

〈実践結果の考察〉

インプロや朗読劇の表現活動を基軸とした授業展開では、数値としてのデータを用いて問題を解決することは難しいが、学生のレポートからは、学生にとって以下のような自身の変容効果があったと推察できる。

- ・表現することへの恐れ軽減。
- ・自分を信じること。(自己肯定感)
- ・周りに関わりながら想像(創造)表現することの楽しさ・大切さの体得。(協働意識向上)
- ・自分の表現を伝えたい、理解してほしいと思う場合は相手のことを受け入れる(尊重する)。(相互理解)
- ・物事に対する前向きな姿勢。(ポジティブシンキング)
- ・演劇表現活動を通じた他分野との連携思考。

筆者がこれまで授業で行ってきたインプロ、朗読劇、劇あそびの活動は学生たちにとって、表現に対する苦手意識に変化が生まれ、表現することを楽しむことができ、また、学生自らの想像性や創造性を発揮し即興的な表現とその個人の表現を周りが受け止める関係と協働性を大切に体験する表現力を豊かにするうえで有効であることが明らかになった。しかし、インプロにおける「失敗」「評価」「未来・変化すること」「見られること」の4つの恐れは学生たちの幼少期からの体験から現在に至るまで根強く浸透している。それを打破するためには「普通にやる・頑張らない」「独創的にならない・当たり前のことをする」「賢くならない」「勝とうとしない」「自分を責めない」「創造の責任を取らない」と言った逆説的(paradoxical)な考え方があり、これをベースに授業展開するようにするのだが、実際の授業の中で学生たちに恐れなく心がかきさせるには、指導者としてどのようなアプローチが必要か考案しなければならない。

学生たちは自身の「失敗」で酷評されたり、ひやかしを受けたりしてきた者が多いので、まずは失敗を恐らせないことである。インプロは失敗しても誰も責めない、ひやかさない。この点が学生たちにとって心も身体も劈(ひら)くことになり表現することへの恐れを緩和していく。そして、活動中、再三用いる意識として「相手がよく見えるようにする(give your partner

good look)、相手にいい時間を与える (give your partner a good time)、相手をインスパイア (ひらめかせる・鼓舞する) する (inspire your partner)」といった仲間を大切にすることを意識が学生たちのインプロ活動をより活性化するのである。たとえ自身が失敗しても相手にとって悪いことでなければ、様々なアイデアや行動を試すようになるのである。自分が楽しむだけでなく、相手を喜ばせることができると協働で創造することが楽しめるようになる。

授業の中で行われたインプロ活動では、表現することは「何か特別なことを、人とは違うことをしなくてはいけない」と思っている者がいる。それはかえって既存の狭い範疇での発想に偏り、独創的でなくなってしまう。「普通にやる・頑張らない」ということがいかに独創的になるかを体得させてくれるのである。そして、学生たちが感じているようにインプロ活動は、様々な人たちと関わり、互いの表現を認め合い、受け入れ合うことができるので人間同士のコミュニケーションが図れる最大の活動と言えるのである。学生たちは表面上の仲良しから本音で語り合える仲間といった人間関係が深められることを実感しているのである。インプロ活動は即時的に普通にやるので、その人の人となり素直に表現される。それをお互いが認め合うわけであるから、関係が深まらないわけではないのである。

このことは、実際に、学生たちと朗読劇を作り上げていく過程でも重要な役割を果たしてきた。インプロ活動によってお互いの意思疎通を図ることのできた学生たちは、朗読劇の完成に向けても、演技や取り組む姿勢に対し互いに指摘し合い、また協力し合い、協働の意識が高められてきた。インプロ活動で培った無理のない発想は臨機応変に対応する力となる。子どもたちの前に立つ魅力ある大人 (保育者) とは表現力が豊かな大人 (保育者) であるべきである。保育現場で子どもたちの前に立つ前にインプロから朗読劇といった授業プログラムは学生たちの表現力を豊かにするのである。

4. 指導者の省察

指導者の自己分析として：授業中、学生たちの行動に対し、指導者としてその時その瞬間に起こっている状況にどのように対応するか (できるか) また、その状況から何を感じ取りそれに応えていかに新たな状況を作り出すかといった「状況との対話」が極めて重要となる。ショーンの提起する新たな専門家像が「行為の中の省察」に基づく「省察的実践家 (reflective practitioner)」である。専門家の日々の職業生活は、暗黙の「行為の中の知 (knowing in action)」を基盤にして行われている。有能な専門家の実践ほど、暗黙の認識と判断、そして即興的で無自覚な振る舞いに依存している。状況との対話を繰り返しながら新たな「行為の中の知」を生み出していくのである。一つの状況にある問題を学生たちと対話をもって解決しても、また新たな状況が生まれ問題も提起される。しかしながら、こうした行為を繰り返しながら指導者としての資質が磨かれていくものと感じている。保育者の表現力育成を目指すには、教員も学生も共に実践と省察を繰り返すことが必要である。筆者の行為の中の省察をもって新たな専門家像を目指しつつ、学生の表現力が豊かに育っていく過程を見守ってきたい。

〈参考文献〉

- ・ E.H Erikson 仁科弥生 翻訳 (1977) 『幼児期と社会 1』 みすず書房
- ・ Ernest T. Stringer 目黒輝美／磯部卓三 監訳 (2012) 『アクション・リサーチ』 星雲社
- ・ 秋田喜代美／恒吉僚子／佐藤学 (2005) 『教育研究のメソドロジー』 学校参加型マインドへのいざない 東京大学出版会
- ・ 木村浩則 (2016) 「今日の教師教育改革と『省察的実践家』論」 文京学院大学人間学部研究紀要Vol.17
- ・ 岡田陽 (2008) 『[オンデマンド版] 子どもの表現活動』 玉川大学出版部
- ・ 平山許江 (2013) 『領域研究の現在 (環境)』 萌文書林
- ・ 西村清和 (2009) 『遊びの現象学』 勁草書房
- ・ 鶴見俊輔 (1960) 『芸術の発展』 講座・現代芸術第一巻 勁草書房
- ・ 高尾隆著 (2006) 『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか?』 フィルムアート社
- ・ キース・ジョンストン／三輪えり花 訳 (2012) 『IMPRO』 而立書房
- ・ 小林由利子・中島裕昭・高山昇・吉田真理子・山本直樹・高尾隆・仙石桂子 (2010) 『ドラマ教育入門』 図書文化
- ・ Donald A. Schön 柳沢昌一／三輪建二 監訳 (2007) 『省察的実践とは何か～プロフェッショナルの行為と思考～』 鳳書房